

從五位下息長真人臣足 一首【年四十四】

五言春日侍宴

物候開韶景
淑氣滿地新
聖衿屬暄節
置酒引播紳
帝德被千古
皇恩洽萬民
多幸憶廣宴
還悅湛露仁

物候は時節と云ふと同じ。韶景は春ののどかなる景色。「梁元帝纂要」に春景曰韶景とあり。淑氣是も春ののどかの氣。聖衿は天子の衿懷。屬暄節、暄は「アタタカシ」、寒の反對。此の節を以て會を開くが可しと、天子が思し召したるなり。引は召すこと、播紳、播は可なり、縉紳に作るもの不可。束帶の時に笏を大帶に插む。轉じて公卿の義と爲る。西洋の「ゼントルマン」と混ざる勿れ。帝徳、皇恩以下の文字は字の如し。

從五位下出雲介吉智首 一首〔年六十八〕

五言七夕

冉冉^{トシテ}逝^テ不^レ留^ラ
 時節^チ忽^ク驚^レ秋^ニ
 菊風^キ披^キ夕霧^ヲ
 桂月^ス照^ス蘭洲^ヲ
 仙車^リ渡^リ鵲橋^ヲ
 神駕^ユ越^ユ清流^ヲ
 天庭^ヘ陳^ヘ相喜^ヲ
 華閣^ク釋^ク離愁^ヲ
 河橫^テ天欲^ス曙^{ケント}
 更^ニ歎^ス後期^ノ悠^{ハルカナルコトヲ}

冉冉は過ぎ行く貌。春も夏も已に過ぐ、今日は已に七月七日と爲る。菊花の風、
 は夕の霧を吹き拂ひ、桂花を照す月は蘭洲まで光及ぶ。仙車と神駕、織女星と牽
 牛星は天の鵲橋を渡り、或は天の清流を越えて會合する。而して天庭に於き、華
 閣に於て會見を喜び、且忽ちにして離別を愁ふ。而して此の夕も亦冉冉。皓皓た
 る天河も、遂に澹澹と爲り、翌曉に近づかんとす。更に悲嘆するは後期悠、來年
 の七月七夕ならでは再會せぬ。其の悠なるを誰か歎ぜざる者あらん。

主税頭從五位下黃文連備 一首〔年五十六〕

五言春日侍^ス宴^ニ

玉殿風光暮^レ
金墀春色深^シ
雕雲過^{トマツル}歌響^ニ
流水散^ニ鳴琴^ニ
燭花粉壁^ノ外^{ホカ}
星燦翠煙心^ニ
欣逢^{ヨロコブ}則^{コトヲル}聖日^ニ
束帶^{シテ}仰^ク韶音^ヲ

玉殿、金墀は、宮中なること分明なり。風光暮、春色深、是れ如何が解すべきや。普通詩の上より論ずれば、風光暮なれば、春色闌にして春色深にあらず。春色深ければ風光暮にあらず。風光半なり。故に今は夕暮の暮と見る。晚宴の氣味を言ふと知るべし。雕雲は歌の美聲なるを言ひ、流水は琴の好音を言ふ。琴の好音に感じて流水も散ずるなり、歌の美聲に感じて雕雲も過まるなり。燭花粉壁外、地上の近景。星燦翠煙心、天上の遠景。則聖日、昇平日と同じ意味。韶音は、天皇の玉音を言ふ。

從五位下刑部少輔兼大學博士越智直廣江 一絶

五言述懷

文藻カ我所カ難カタシトスル
莊老ハ我所カ好ム
行年已過レ半
今更タメニ爲レ何ノ勞セン

學問するは易く、文章を作るは難し。目は高く、手は低し。古今の漢學者と稱する者、大抵此の弊を免れず。殊に今日の漢學者を見るに、此の文藻の十字、大に其の病に中るあたを覺ゆ。此の人古の大博士、今の大博士たる者其れ如何。

從五位下常陸介春日藏老 一絶〔年五十二〕

五言述懷

花 色 花 枝 染_メ
鶯 吟 鶯 谷_ニ 新_{ナリ}
臨_レ 水_ニ 開_キ 良 宴_ヲ
泛_レ 爵_ヲ 賞_ス 芳 春_ヲ

春色を賞して酒を飲み、而して述懷は何人も多く此の如し。

從五位下大學助背奈王行文 二一首【年六十二】

五言秋日於長王宅宴新羅客一首賦得風字

嘉賓韻小雅
設席嘉大同
鑒流開筆海
攀桂登談叢
盃酒皆有月
歌聲共逐風
何事專對士
幸用李陵弓

長王は長屋王なること疑ひ無し。韻は、嘉賓が韻ふなり、余は歌の意に訓む。小雅は『詩經』に出る字、燕饗に用ゆる樂を言ふ。「大雅」と「小雅」とに就て種種の説あり。余嘗て『詩經國譯』【四四六】に於て詳説せり。設席嘉大同、日本と新羅、國已に異なる。風俗の小異はあるべし、道は大同、相會して嘉すべきなり。鑒流の十字、今日の嘉會を言ふ。開筆海、賓主共に訶を賦し、文を書するなり。攀桂、「魏徵賞舊左右議」に、今時來有連。天門已開。故攀桂之譏未絶。積薪之歎爲深。「杜甫、八月十五夜月詩」、轉蓬行地遠。攀桂仰天高。高位高官に登るを攀桂と曰ふ。登談叢の文字は、異なもの之感あるが、要するに多人會する場合に、古今攀桂者を論談するは普通なり、此の意味も亦然らんと思はる。盃酒皆有月、夜に入て飲猶ほ止まず、月影が盃に移るを言ふ。歌聲共逐風、風の爲め歌聲の遠く流るゝを言ふ。何事專對士、幸用李陵弓、此の二句未考。

五言上巳禊飲應詔

皇慈被萬國

帝道沾_ス羣生_ヲ
竹葉楔_ニ庭滿_ニ
桃花曲浦輕_ニ
雲浮天裏麗_ニ
樹茂苑中_ニ榮_ニ
自顧試_{ミテ}庸短_ニ
何能繼_グ叡情_ヲ

楔は、被「ミソギ」と同じ、惡氣を拂ひ除くなり。王羲之が蘭亭に於て修「楔事」より、日本に傳來し、三月三日を楔飲と言ふ。又春楔と曰ふ。七月十四日の秋楔に對す。一、二の句對法を用ふ、竹葉、字の如く竹の枝葉を以て楔庭を淨める。而して曲浦には、桃花頗る盛んなり。雲浮の五字は、天上の春景。樹茂の五字は、苑中の春景。詔に應じて詩を賦せんと欲するも、庸才短劣、何ぞ能く叡情の貴きに繼ぐを得んや。

皇太子學士正六位上調忌寸古麻呂 一首

五言初秋於長王宅宴新羅客

一面金蘭席
三秋風月時
琴樽叶幽賞
文華叙離思
人含大王德
地若小山基
江海波潮靜
披霧豈難期

長屋王を悉く長王と爲したるは、何人の教ふる所なるを知らず。屋の一字を除き、それが敬稱と爲るにもあらず、知らず當時の人は、何等の據る所ありてにや。一面は滿座の意味なり。新羅客の多人數なることを知るべし。金蘭席は、美麗なる席を言ふにはあらず、交誼を厚うするの意。三秋は新秋と改めて可なり。一に對するに必ず三を以てするの兒童對より勝る。風月は秋を以て一番宜しとする時。叶は適の意味に見よ。琴樽は今日の權迎の宴。文華は新羅の客が歸る離思を紋ぶ。人含大王德、長屋王は身皇統に係るを以て斯く言ふならん。地若小山基、此の句意解し難きが、恐くば淮南王小山の事を以て長屋王を頌する意味ならん。江海波潮靜、披霧豈難期、表面文字の如く、江海波靜かなれば、歸舟も定めし容易ならんとの意なれば、極めて平凡なり。側面に日本と新羅と何等の衝突も無ければ、多少の邪魔即ち霧あるも、之れを披除すること期して待つべしとの意でもあらば、此の詩の誦すべき價值が存するなり。今眞意を知り難し。

正六位上刀利宣令 二一首【年五十九】

五言秋日於長王宅宴新羅客一首賦得稀字

玉燭調秋序
金風扇月幃
新知未幾日
送別何依依
山際愁雲斷
人前樂緒稀
相顧鳴鹿爵
相送使人歸

玉燭調秋序、秋は秋らしき玉燭を點するなるべし。金風と曰つて西風と曰はず。玉と金と對するなり。月光が幃を照す、風が其の幃を吹き扇ぐなり。新知、新羅の客は所謂新知にして、遇ひて未だ久しからず。會ふも忽ち別を敘す、情に於て何ぞ依依たらざらん。依依は別るゝに忍びざる貌。山際には、愁雲、即ちイヤナ雲は斷れてあるが、人前には別離ありて、樂緒稀、人前は人間の意、緒は意の意。相顧鳴鹿爵、『詩經』に鹿鳴篇ありて、行を壯にする時歌ふ。行を壯にするには爵即ち杯酒を備ふ。新羅の客も國を出るときは、定めし鹿鳴を歌はれしあらん。來る時の壯に反對に、別を送るは寂寞の情あるなり。此の篇顧の一字を平とすれば、唐の五律の整正なるものとなる。

五言賀五八年

縱賞青春日
相期白髮年
清生百萬聖

岳土半千賢
下_レ宴_ニ當時_ヲ宅
披_レ雲_ヲ廣樂_ヲ天
茲時盡清素
何用_ニ子雲_ガ玄_ニ

五_ハ八_ハ年_ハ、自賀詩ならん。我邦にて四十を以て初老と稱す、乃ち以て賀するなり。
縦_ハ賞_ハ青_ハ春_ハ日_ハ、少年の時は少年を樂しみ、而して短命なるを嫌ひ、白_ハ髮_ハ年_ハまで生存
せんと期す。清_ハ生_ハ以下の數句、意義明白ならず、唯結末、清_ハ素_ハ、子_ハ雲_ハ玄_ハ、楊雄は
太玄經を著して玄の去たる所以を辨ず。去は黒なり、素は白なり、心清白であれ
ば、特別に子雲が太玄經など讀む必要なしとなり。

大學助教從五位下下毛野朝臣蟲麻呂【年三十六】

五言秋日於長王宅宴新羅客竝序賦得前字

夫秋風已發。張步兵所以思歸。秋氣可悲。宋大夫於焉傷志。然則歲光時物。好事者賞而可憐。勝地良游。相遇者懷而忘返。況乎皇明撫運。時屬無爲。一文軌通而華夷欣戴之心。禮樂備而朝野得懼娛之致。長王以五日休暇。披鳳閣而命芳筵。使人以千里羈游。俯雁池而沐恩盼。於是雕俎煥而繁陳。羅薦紛而交映。芝蘭四座去三尺。而引君子之風。祖餞百壺敷一寸。而酌賢人之酌。琴書左右。言笑縱橫。物我兩忘。自拔宇宙之表。枯榮雙遣。何必竹林之間。此日也。溽暑方間。長臯向晚。寒雲千嶺。淳風四域。白露下而南亭肅。蒼煙生以北林藹。草也樹也。搖落之興緒難窮。觴兮詠兮。登臨之送歸易遠。加以物色相召。煙霞有奔命之場。山水助仁。風月無息肩之地。請染翰操紙。卽事形言。飛西傷之華篇。繼北梁之芳韻。人操一字。

聖時逢七百
祚運啓一千
況乃梯山客
垂毛亦比肩
寒蟬鳴葉後
朔雁度雲前
獨有飛鸞曲
並入別離絃

蟲麻呂は豐城命の後、官式部權少輔なり。張歩兵は誤なり。三國魏に阮籍字は嗣宗。官歩兵校尉に至るを以て。人阮歩兵と稱す。今の詩と關係なし。晉の張翰字は季鷹、官大司馬東曹掾と爲る。秋風起るに因て、吳【故郷】中の菰菜蓴羹鱸魚の膾を思ひ、遂に官を辭して歸る。宋玉は戰國楚の人。屈原の弟子。楚の大夫

と爲る。其の師が放逐せらるゝを悲み、九辨を作り、其の志を述べ以て之を悲しむ。歳光時物、變る毎に詩人之を悲む。而かも勝地良遊は、留連して返るを忘る。況や我皇國は時運、無爲太平なり。文軌、軌は軌躅、文華の車の行く跡、互に通交して、中國【華】も塞外【夷】も均しく欣戴の心を懷き、而かも禮樂は完備して、上下共に懽娛の致を表す。五日休暇、公暇は五日に一度ならん。鳳閣は長王宅を稱して言ふ。使人は星使なり、公使なり。雁池、梁の孝王、曜華宮を作り、兔園を築き、中に雁池あり、池間に鶴洲あり。恩眄は恩顧と同じ。彫俎は肉を盛る器の美麗なるを曰ふ。美麗なるが故に、煥として光あるなり。羅薦は席具の義麗なるを曰ふ。芝蘭四座去三尺、貴きを同うする人の交を芝蘭と曰ふ。而かも禮あり、王と臣下とは去ること三尺隔つ。是れ君子之風なり。祖餞、送別の宴會。酒は百壺あり、敷こと一寸、見れ即ち賢人之耐なり。何必竹林之間、竹林の七賢は各の禮法を無視した遊びなれど、今は禮法正しうして、而かも物我、彼此上下の隔たりを忘る。溽暑方間、秋暑も此の日は聊か涼し。長皐は、修皐と同じ。丙午月を云ふならん。寒雲は溽暑と對す。嶺には寒雲あり、而かも四面は淳風吹く。南亭には白露、北林には蒼煙、加之草は枯れ、樹は落つ。秋興良とに窮り無し。或は酒、或は文、離るゝに従て情遠疎と爲る。人は風物景色の爲め、或は奔命し、或は休息す。乃ち筆を執て、詩を賦し、紙に書す。西傷、北梁、此二事未檢。操一字、分韻の法此の時已にありしなり。

聖時、一本出時に作る、聖時意義有り、出時意義無し。祚運も聖時と同じ。要するに一千七百年の紀元を経たりとなり。梯山客は新羅の客。垂毛我も彼も頭髮の容同じきを曰ふ。寒蟬、朔雁、共に秋日の景。飛鸞曲は別離に歌ふものならん。未二檢出據。此の篇平仄整正せざること、諸家と同一なり。